

「遺された子ども」の思いを受け止め、子どもらしい”育ち”を見守る社会に

カウンセリングスペース「リヴ」代表

よしだ 吉田 まどかさん



自死を発端にそれぞれが「秘密」を抱える家族

カウンセリングスペース「リヴ」を主宰しつつ、2002年から「親の自死を語る会」を始めました。2か月に1回、10代から60代まで幅広い年代の参加者が「親を自死で亡くした子ども」の立場で思いを語り合います。

私自身、中学3年の時に父親を自死で亡くしています。ある時、親を自死で亡くした子どもたちの文集を読む機会があり、自分のしんどさと重なる部分が多いことに衝撃を受けました。

自死によって遺された家族は秘密を抱えます。また立場によって抱える秘密も違います。私の場合、修学旅行中に父が自死したので、家族が大変な時に自分だけがいなかったという罪悪感や、本当のことを知らされないことへの不信感に苛まれました。おとなは「子どもは気づいていない」と思いがちですが、子どもは場の空気やおとなの顔色から多くのことを読み取り、感じています。文集にも子どもたちがけなげに生きている様子が書かれていて、自分の時と変わらない現状に何とかしたいと考えました。

「いい子」の押し付けに苦しむ子ども

その直後に自死遺児をテーマにした大きなシンポジウムに関わりました。おとなたちが真剣に議論する様子をみて感動すると同時に、打ち合わせでは涙が止まらず困りました。14歳から1年ごとの過去の自分が全員出てきて、「すごいけど、私が14歳の時にいてほしかった」と言っている感じがしたのです。その時、「私はずっと誰かに話を聴いて欲しかったんだ」と気づきました。

遺された親との葛藤に苦しんでいるという人も多くいます。日本社会は「いい子」「いい親」という型を押し

し付ける空気が強く、辛いことがあった時ほど子どもは親の気持ちを慮り、支えることを求められます。思春期を迎えて自己主張や反抗をすると「親に心配かけるな」と周囲から責められるなど、当たり前の”育ち”を否定されることが少なくありません。けれども子どもは人に言われずとも親のことを考え、経済的に負担をかける自分の存在を申し訳ないとすら思っているのです。親はそんな子どもの思いに気づけず、最終的に家族がバラバラになることもよくあります。

「自死遺族という立場がすべてではない」

親の自死を体験した「子ども」たちの話を聴くなかで、第三者による「家族調整」に取り組みたいという思いが芽生えました。家族といってもみんなが同じ気持ちではないし、同じ気持ちで同じことをしなくてはいけないということもありません。家族ならではの甘えや反発もあります。そんな時、第三者が間に入って調整できれば、それぞれが楽になれることもあると思うのです。

「語る会」は、その場限りの出会いです。継続して来られる方もいますが、食事に行ったり、ふだんから連絡を取り合ったりということはあえてしません。私たちが帰る場所は会ではなく社会だと考えるからです。「自死遺族という立場が私のすべてではない」と言われる人も多くいます。つらい思いを安心して語れたら、社会で自分の居場所をそれぞれ見つけてほしいと願いながら活動を続けています。

カウンセリングスペース「リヴ」
TEL・FAX: 06-6940-7036(月・金の午前受付)
<http://www.space-liv.net>

